

小生も社会人として「第一生命相互会社」に勤め始めてから早 3 ヶ月が過ぎた。現役時代の習性で、後ろ（に副官等が付いてきているかのように）を振り返って「おい」と声を掛けても応える者が居ない、それ故にどうすれば良いか解らずに立ち止まってしまう、そういう毎日から徐々に脱して何とか慣れつつあると本人は思っているのだが・・・。思いの外早かったと言うべきか、否其れ位の時間は当然必要なのだろうとも言えるし、まだまだ時間を要する筈だとの指摘もある。

連日の猛暑にも関らず、1 日一万歩を目指して万歩計を腰に昼休みに歩いている。と言っても炎天下を歩いている訳ではない。有楽町駅から大手町、東京駅等の地下通路を汗を余りかかない程度に歩いている。地下ギャラリーと言うのだろうか、読売新聞社が古きよき日本を思い出す縁になればと「千と千尋の神隠し」「隣のトトロ」「おもひでほろほろ」等のアニメの一コマを数十枚描いており、通行客が立ち止まって眺めている。遥かなる故郷に思いを馳せ、癒されているかのようだ。

「閑話休題」

第一生命に過ぎたる物の一つと口の悪い先輩諸兄に揶揄される事もある「サラリーマン川柳」（サラ川）に、小生も少しだけ関連する事となっている。サラ川の番外編として防衛庁編を選考しているが、その選考や解説に関する事となっている。防衛庁編は防衛庁・自衛隊に話題を絞っているので、一般の方には理解し難い面が多いので、我々に関る事となる。一般の方にその面白さを如何に解ってもらえるかが私の仕事か。

サラリーマン川柳は、昭和 62 年にスタートし、既に 17 回を数えるに至っている。回を追う毎に応募者も多くなり、17 回迄の応募総数は当社の HP によれば、約 71 万編だとのことである。確かに、インターネットで調べてみるとサラリーマン川柳と類似の川柳を募集したり掲載しているものがあるが、この種の中では矢張り第一生命のものがその質においても量においても他を圧倒している。

「5・7・5」と言う、たった 17 文字の中に、世の中・世相を見事に表現する。時にシニカルに、或いは殊更に大仰に、はたまたあくまでも陽気であったりする。端的に社会を風刺し、人生の悲哀を述べ、ぼやきもあり、自らの疎外感を滲ませた句もある。サラリーマン川柳と言っても、話題はサラリーマン生活に止まらず、夫婦や親子関係などの家庭生活等までも含む広範な話題を適格に切り取って軽妙に表現している。素晴らしいセンスを持っている。たいした物だと思う。物事を端的に捉える目とそれを適確に表現する筆力を兼備していないといけない。投稿者全員が何も世の中をシャ（斜）に眺めているのではあるまい。本当は真摯に向き合っているから、名句が生まれるのである。

中には味わい深いのもあり、考えさせられる句も多い。特に、雅号と一体として味わえば、それだけ深くなる。雅号自体が川柳の一部を形成していると言っても過言ではない。

文句無しに笑えるものもあれば、クスッと己に当て嵌めて成る程と妙に納得してしまう句もある。かつては自分もそうだったなと思い出されることもある。

部下が上司を皮肉って屈託がなければ、上司も負けてはいない。強烈な反撃を試みる。

上司が部下を新人類と言うか異邦人を見るかの様に言えば、その年になっている身とすればそうだと我が意を得たりの心境になる。何時の世も上司と部下に関する話題には事欠かない、サラリーマンの宿命である通勤や転勤に関連する句も多く、ひき交々である。家庭編では、身につまされる気がして、つい弱い夫の立場に時に同情したくもなる。

第一生命のサラ川はその時の社会背景を映している。各回のベスト10を眺めてみると、あの年にはそんな事があったなあと思ひ出さずにはおれない。

「上司・部下編」「仕事・一般」「通勤・転勤」「パソコン・携帯電話編」「家庭編」等のテーマ別にも収録されているので、アクセスしてみてもどうか。

著作権が第一生命にあるので、ここで気に入った句を披露・掲載できないのが残念だが、下記のアドレスにアクセスして貰えば、確認できる。一服の清涼剤になる事間違いないと請け合う。

<http://event.dai-ichi-life.co.jp/senryu/index2.html>

第4回から第16回の応募作品から、イラストレーターの山藤章二氏、川柳作家の尾藤三柳氏及び第一生命が選定した秀作をまとめた本が講談社より「サラ川傑作選」として発売されている。既に9冊発刊されているので、興味と関心のある方は書店で求めて頂いたら良い。

今年もまた、例年と同じ要領で募集が始まるだろうと思う。沢山の方の応募を楽しみにしている。軽妙洒脱な納得させられる名句を待っている。そして防衛庁編も募集する筈があるので、選考者泣かせ位になって欲しいものだ。

(了)